流離譚（新潮連載 昭和五十一年十一月号・第八～十三回）

新潮五十一年十月号は流離譚連載を休んでいます。休んだ理由は明らかにされていませんが、以降に天誅組の関連の話が続きますので、その内容を整理していたのではと思っています。が、単行本「流離譚」発行の際にも改訂が行われています。連載第八回から十三回までの話題を単行本の記載内容に従い取り上げます。

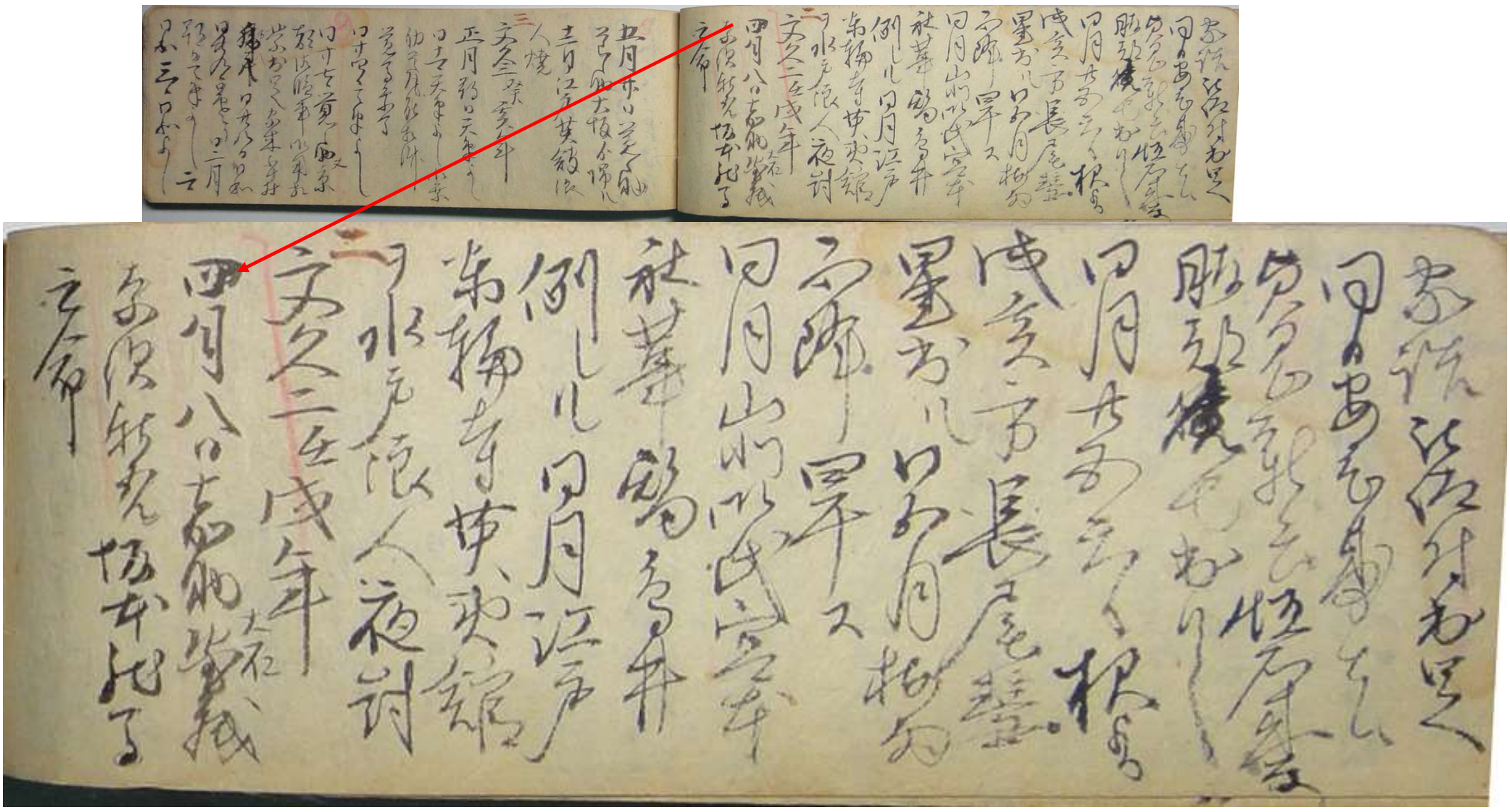
嘉助達が起こした吉田東洋暗殺の文久二年の文助日記の記載が少ない理由について流離譚に

ことによれば、文久二年の文助日記にたつた三行しか記述がないのは、このときに文久二年の分だけ破棄し、あとになつて三行だけ簡単に書きこんだものかとも考へられる。と書いています。

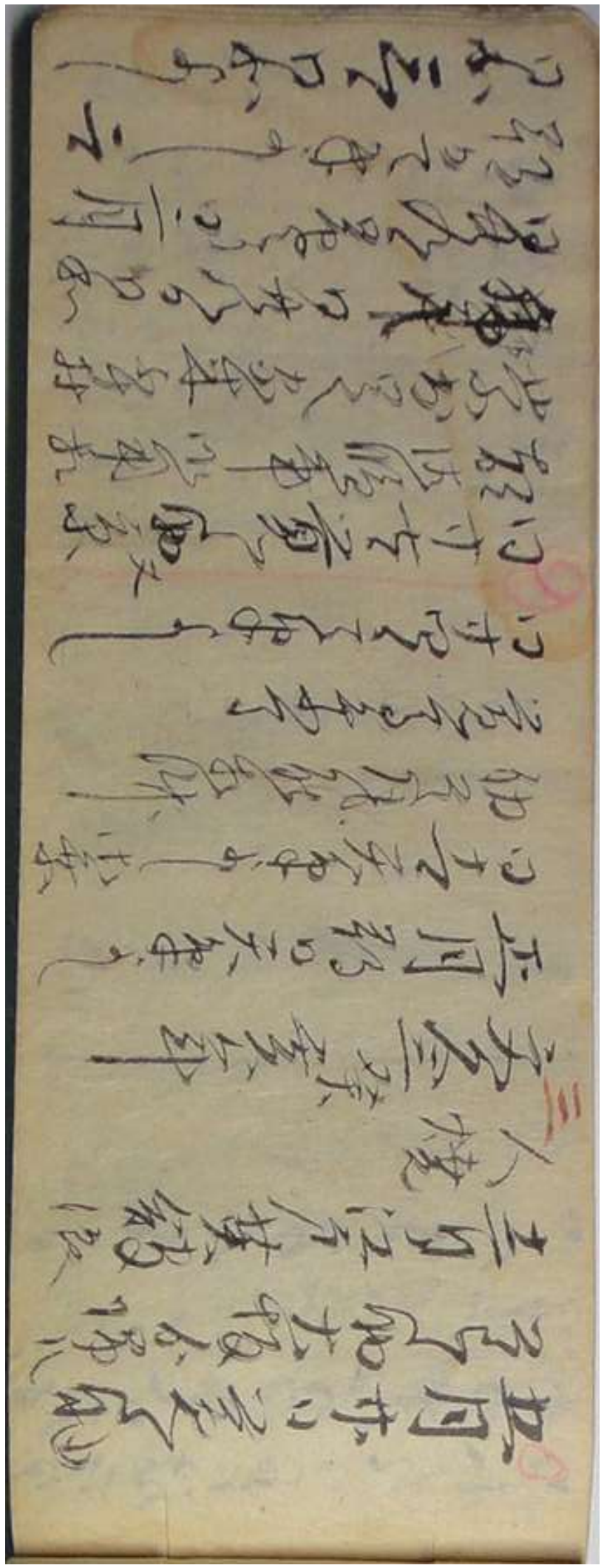
文久の頃の日記は、蔓延二年正月、二月(蔓延二年二月に文久に改元)、三月に数行、文久元年四月廿一日覚之助、道之助「大坂御陣家詰被仰付出足」の後五月「江戸東輪寺英夷館ヲ水戸浪人夜討」でこの年に日記は終っています。次の文久二年は「四月八日嘉助大石團蔵那須新吾坂本龍馬亡命　五月廿日覚之助道之助大坂ゟ帰ル　十二月江戸英館浪人焼」で終りです。このように蔓延元年から文久二年の日記に記載された日は極端に少ない。次頁以降に　文助日記を示す。

墨で字を書くと最初は濃く、続けて書けば段々薄くなる。日記を毎日書いていれば、書き始めの日付は濃くなるので、日記を毎日付けていたか否かが分かります。

四月廿五日覚之助、道之助出発は濃い墨で書かれています。その前は日付が所々濃いですが、墨の薄い字が続いています。数日分を一気に書いているようです。日々のことを別にメモし、日記に書き入れた可能性はあります。



文久元年の後半～文久二年四月の亡命迄の日記



文久二年は三日分しか記載されていません。日数が少ない事を流離譚では

文久二年の分だけ破棄し、あとになつて三行だけ簡単に書きこんだ　としていますが和紙の紐綴じの日記に、その形跡は見られません。文久二年五月に覚之助が帰って来て、亡命の話、江戸で発生した事件などを文助は聞いて書き込んだのではないか考えます。その後の「十二月江戸英館浪人焼」も覚之助が出府して得た情報と考えます。

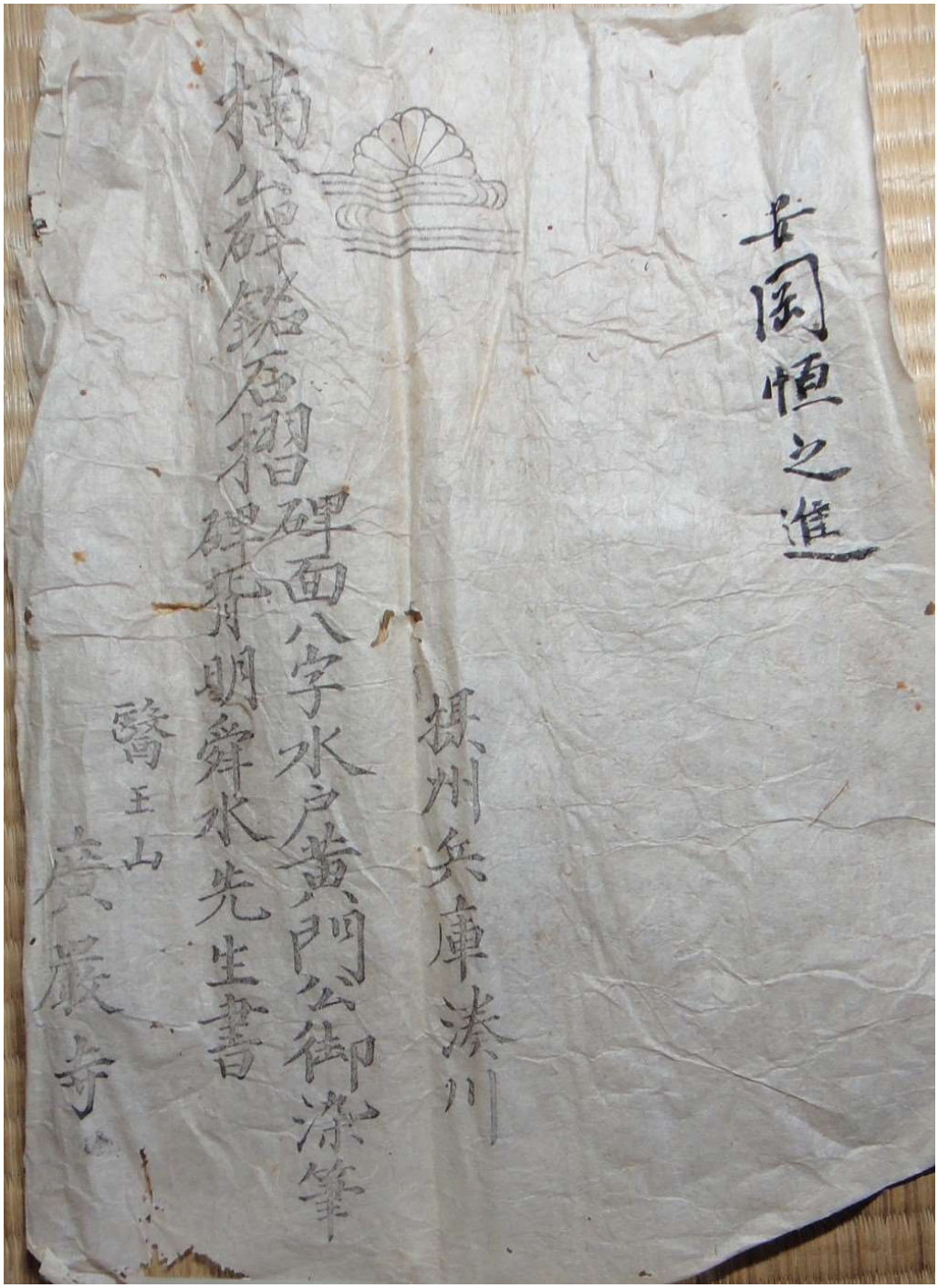
流離譚の連載九回は　過去の事実といふのは、わかつてゐるやうなことでも実際にはなかなかわかりにくい。事実にいろいろ側面があるし、書き遺されたものは疑ひ出せば、すべてが怪しくなるからである。と書き出している。歴史小説を書く難しさを言っているのだろうか。

この回には嘉助等三人の逃走の一場面　金毘羅詣りにかこつけて琴平の町で酒を飲みつづけた。・・金毘羅さんの長い石段を馬の如く駆け上り、参拝・・と書かいています。文助の書いた家系圖の嘉助の項に金毘羅山の話　慶應二寅年讃州金毘羅参拝シ由傳言有處長州侯ニ仕居候由委細不分■　を書いています。流離譚はこれとは関係なく金毘羅詣りの場面を書いたのだろう。文助はこれを書いた時、嘉助の死をまだ信じていなかったのだろう。が、数年後の明治三年に嘉助の墓を作っています。

流離譚に琴平の話の後に嘉助達が　湊川で楠正成の墓に武運長久を祈って、・・とあります。

楠正成の墓には従兄弟恒之進（藩からの江戸への研修の途中）、権馬も詣でています。祖父廣助は伊勢詣の際は詣でていないようです。孫達と祖父の尊王意識の違いがあるのでしょうか。恒之進は墓の拓本を購入。現在、墓は湊川神社が管理していますが、三人が詣でた頃は「醫王山 廣厳寺」で管理し、購入した拓本の包み紙に寺の名が印刷されています。

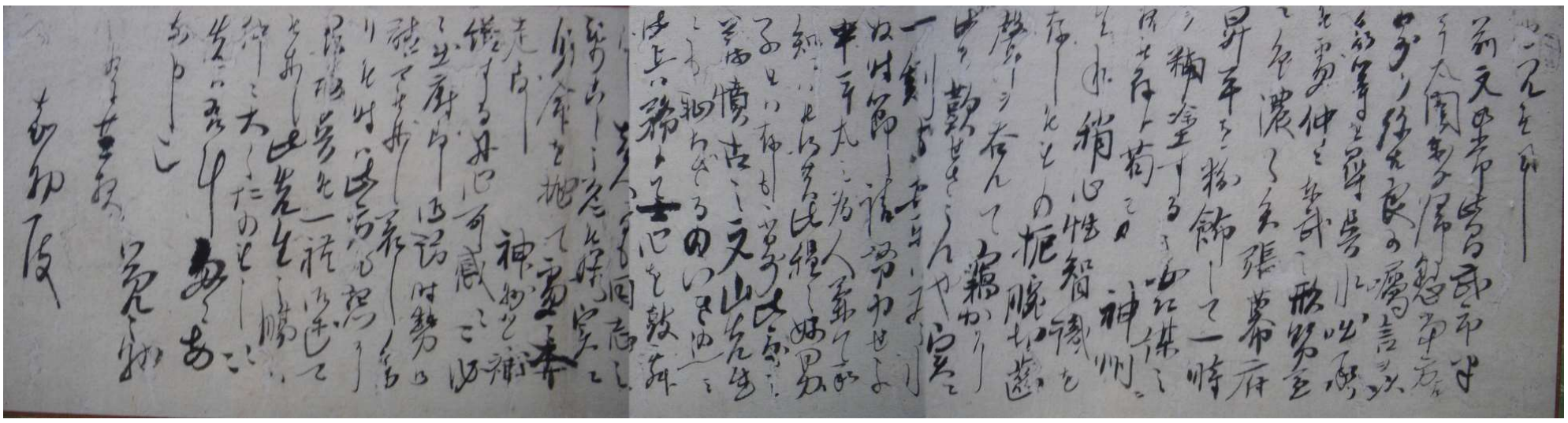
楠正成墓碑の拓本



楠正成　拓本包み紙

嘉助が暗殺に加わったのは　前年（文久元年）九月に（覚之助が）送った手紙で武市へ嘉助が行ったことによる　と流離譚は書いています。この手紙に「文山先生ニも恥ちざるのいき込」と檄を弟に出しています。恒之進が持ち帰ったのか、碑の拓本と一緒に「文山」の拓本がありました。覚之助が獄で書いた漢詩にも文山が出てきます。文山先生は楠正成と推測されます。流離譚に書いている様に実際に嘉助達は　楠正成の墓に武運長久を祈って　立寄ったでしょう。

文助日記に　文久元年四月廿一日　覚之助、道之助、大坂御陣家詰被仰付出足　とあります。湊川（神戸）寄っていた嘉助達と、大坂陣家（住吉）に居た覚之助・道之助の兄弟は近くにいたのです。流離譚に　覚之助がこのとき嘉助に会ったことは確実で、なぜなら覚之助は後にそのことで藩から謹慎を申しつけられてゐるからである。とあります。



他見無用
前文乃常此間武市半
平太関東より帰り当方仝
寄り弥太郎の嘱言以
我等を尋呉れ咄承
候處仲々東武之形勢急
に色濃く矢張幕府
昇平を粉飾して一時
ヲ糊塗する■姦謀の様存し
奉候苟も　神州ニ
生まれ稍心性智識を
存し候もの扼腕切歯
聲ヲ呑んて竊か耳
此を歎せさらんや實ニ
一刻も安楽尓とい能られ
ぬ時節諸努力せよ
半平太之爲人兼て承
知候ハ能得共此程之好男
子とハ存しもよらず此度之
義憤古之文山先生
ニも恥ちざるのいき込を
此上ハ務メて士心を鼓舞
致し壱人ニテも同志之
勢古しらゑ候様實ニ
躬命を拠て處々奔
走致し　神州を補
繕する丹心可感こと必
ゝ出府致し御訪時勢御
聴下サるべき候若し参
り候時ハ此方■懇ろ耳
■■呉候一禮御述て
下サるべく候此先生乃腸ハ
仲々大きくたの毛しく
先■ハ吾計匁ゝあ
奈申候

覺之助

九月廿六　夜

嘉助殿

覚之助から嘉助に送った手紙

山内家史料公記「幕末維新第三編上安政六年～文久二年」に住吉陣家に動員された郷士の中に安岡覚之助の名があり脇に「追下シ被仰付」とあります。追下がどのような刑罰が不明ですが、もう一人清岡道之進にも「追下シ被仰付」付与されています。

流離譚に覚之助の手紙を引用し　一郎（槍浪の従兄）、桑原助馬、松岡菩蔵、清岡道之助など申して読書家これあり候間　と書いています。ここにも清岡道之助の名があります。引用した山内家史料公記の箇所は原図でなく手書きの写しです。「進」が何かの誤りで「助」であれば、野根山二十三士の主導者と同じ名になります。追下された二人に共通するのは強い尊王攘夷思考を持っているということです。陣家に居ると、面倒であるから上部が陣家から追い出したと考えました。

覚之助の派遣は、藩の計画では文久元酉年四月三日出立、文久二壬戌七月交代となっていますので五月の追出は予定外の戻りになります。追下は二人だけでなく、「修馬惣領　太田仲十郎」も次の追下の罰を受けています。

西洋式銃隊ニ入ルヲ快トセズ、相否ミ申處、追下シ被仰付物部川限追放被仰付之、追テ又家嫡ニ被仰付、惣領ニ被付

太田仲十郎が何処の人か不明ですが、覚之助も同じように「物部川限追放被仰付之」の謹慎の罰を受けたのだろう。

山内家史料公記「幕末維新第三編上安政六年～文久二年」に住吉陣家に動員された郷士の中に安岡覚之助の名があり脇に「追下シ被仰付」とあります。追下がどのような刑罰が不明ですが、もう一人清岡道之進にも「追下シ被仰付」付与されています。

流離譚に覚之助の手紙を引用し　一郎（槍浪の従兄）、桑原助馬、松岡菩蔵、清岡道之助など申して読書家これあり候間と書いています。ここにも清岡道之助の名があります。引用した山内家史料公記の箇所は原図でなく手書きの写しです。「進」が何かの誤りで「助」であれば、野根山二十三士の主導者と同じ名になります。追下された二人に共通するのは強い尊王攘夷思考を持っているということです。陣家に居ると、面倒であるから上部が陣家から追い出したと考えました。

覚之助の派遣は、藩の計画では文久元酉年四月三日出立、文久二壬戌七月交代となっていますので五月の追出は予定外の戻りになります。追下は二人だけでなく、「修馬惣領　太田仲十郎」も次の追下の罰を受けています。

西洋式銃隊ニ入ルヲ快トセズ、相否ミ申處、追下シ被仰付物部川限追放被仰付之、追テ又家嫡ニ被仰付、惣領ニ被付

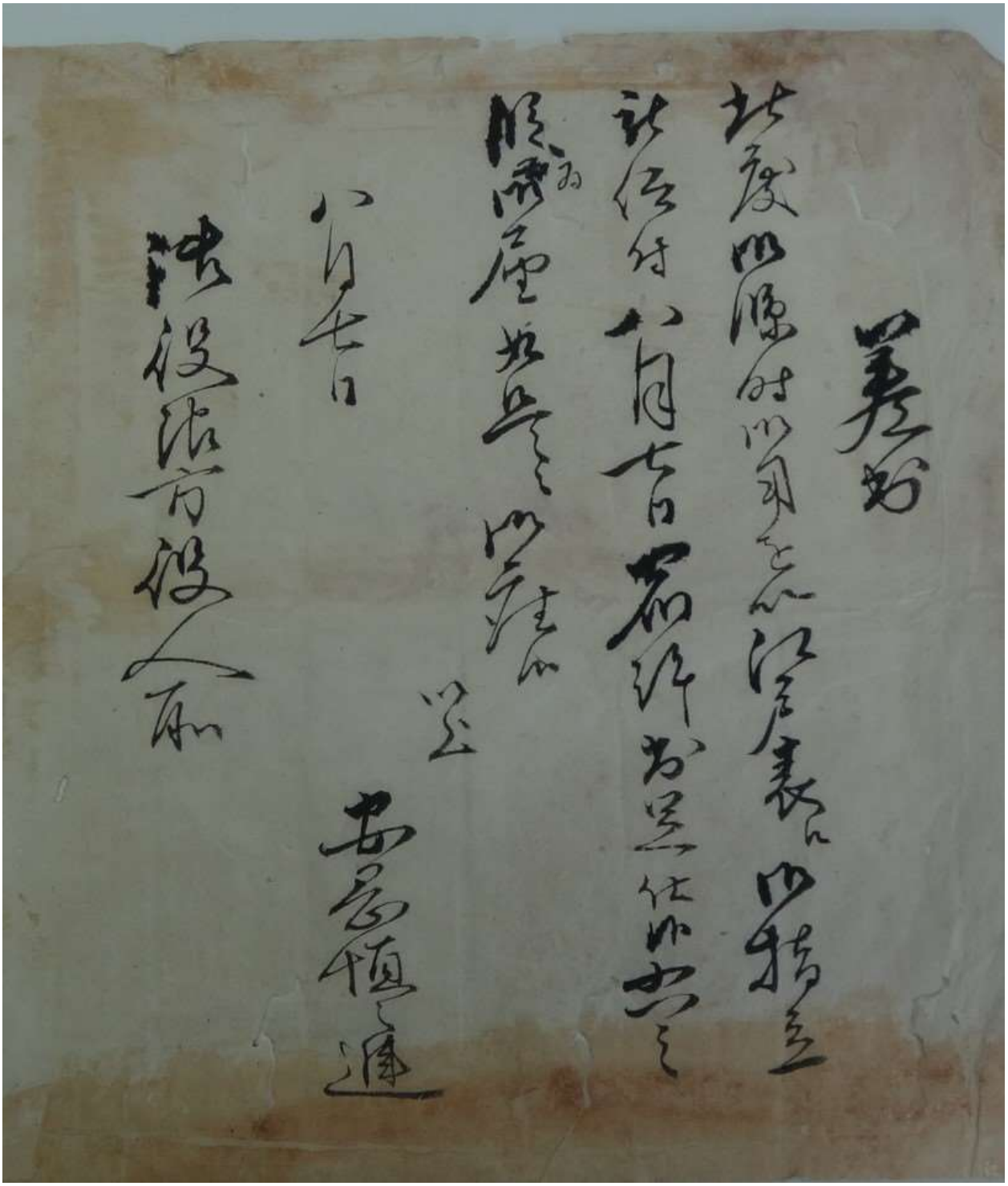
太田仲十郎が何処の人か不明ですが、覚之助も同じように「物部川限追放被仰付之」の謹慎の罰を受けたのだろう。

流離譚連載十一回では「刺殺隊」の選抜、勤王党参加の話がありその中に　その総員二百人ばかりの勤王党に、安岡家

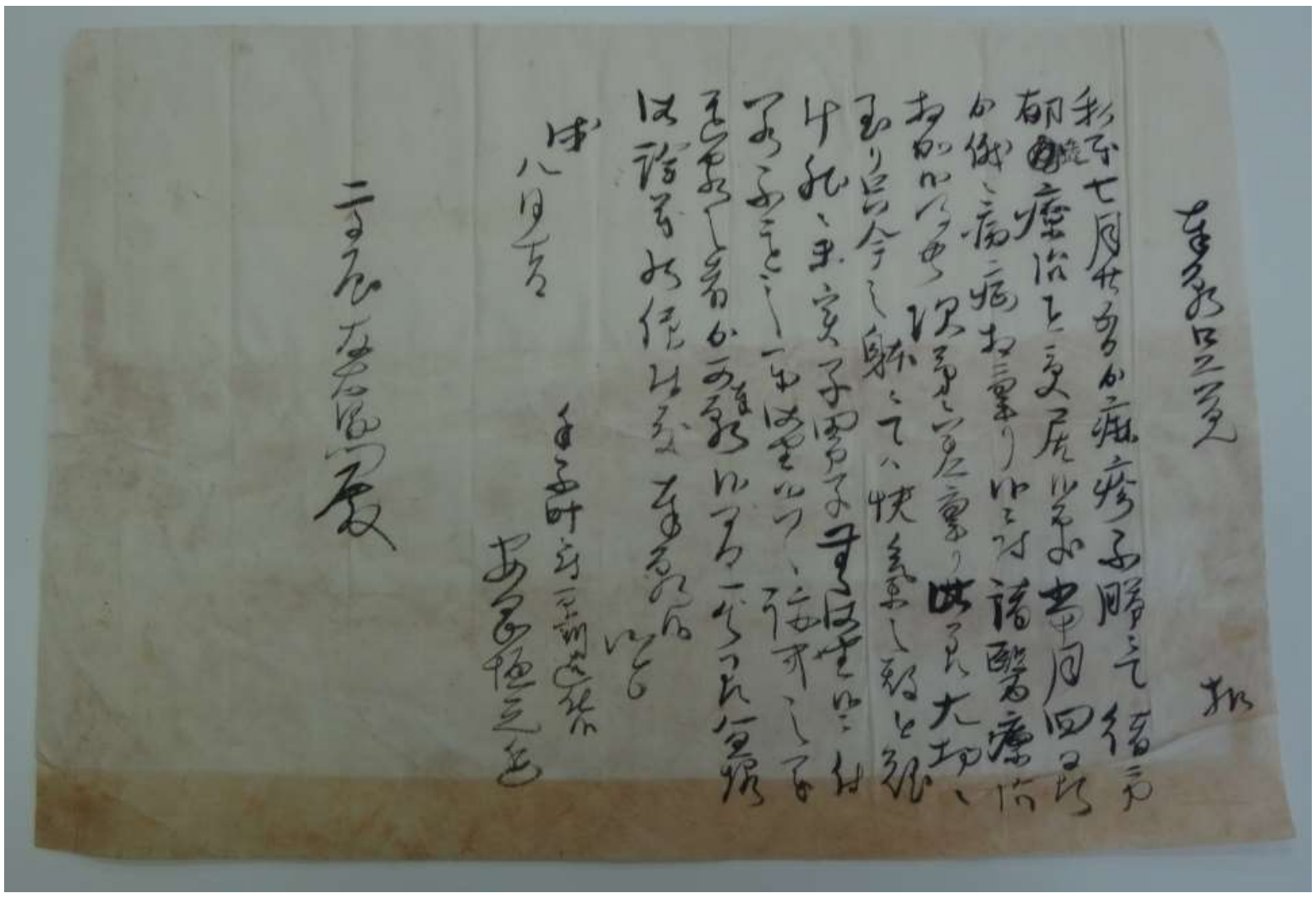
の男は老齢の文助と少年の道之助を除いて他の全員が参加　とありますが、お下の恒之進は勤王党に加盟していません。

嘉助が亡命した頃、恒之進は豊範に同行し参勤出発の予定でした。吉田東洋の暗殺事件の発生で出発が六月から八月になり、そのことを役所に届を出しています。

恒之進は参勤で大坂に行き、ハシカに罹り病死の間際に家の存続の奉願（戌八月七日付）を家老職高屋友右衛門に提出しています。



差出　安岡恒之進　発駕　八月七日



奉願口上覚（扣）　*家老職高屋友右衛門 宛

大坂の齢延寺にある恒之進の墓は土州の川村の墓と並んでいます。流離譚に　川村氏より年も若く、墓も小さくて、碑に何も説明きれていない。そうしたことからみて、川村貞衛は恒之進の上司であり、その墓碑銘は恒之進のそれを代表していると判断していいだろう。

すでに何度も述べたように、文久二年の文助の日記は粗略を極めているので、恒之進が住吉陣屋詰めになり、勤務中に病死したことなども一切記載がないが、系図書の恒之進の項に、文久二壬成年、若殿様御上京御供被仰付於ニ大坂一卒、時ニ　八月七日

とあります。

川村の墓銘碑は次の通りです。

■村貞衛名道忠土佐藩十■

文久二年五月奉　侯命來戌

墨江營適罹麻疹沈綿十旬閏

八月九日没年四十五

川村は五月に来ているので参勤同行の要員でなく、墨江（住吉陣家）の運営に関わる人と思われ、参勤に同行してい

た恒之進の上司ではないでしょう。山内家史料公記・住吉設立で高知より派遣された白札、郷士の一覧に川村の名はありません。予定前の五月に追下で戻った覚之助達の交代要員と考えることも出来ます。

文助が日記に恒之進の病死を書いていないのは何故かと、流離譚には疑問を投げかけています。文助日記を見ると文助は自分より若い人の死亡を書くことはないようです。

恒之進の葬儀は文久三年八月に山北で行われたようです。十歳から郷士農業運営、江戸研修、参勤に同行などを行っていたので、親類縁者、近隣の郷士、小作関連、商売人とか、和食からなどと参列者は幅広いです。次に参列、見舞人を示します。赤尾、四坊、惣田などは地名でその下に個人名があります。

山崎又七　山本安次　安岡覺之助　安岡文助

門田八十八　安岡寿吉

別役俊蔵　坂本権平　吉弘栄次　大石弥太郎

公文欽助　弘光紋□家来　村田弥三郎　谷作七

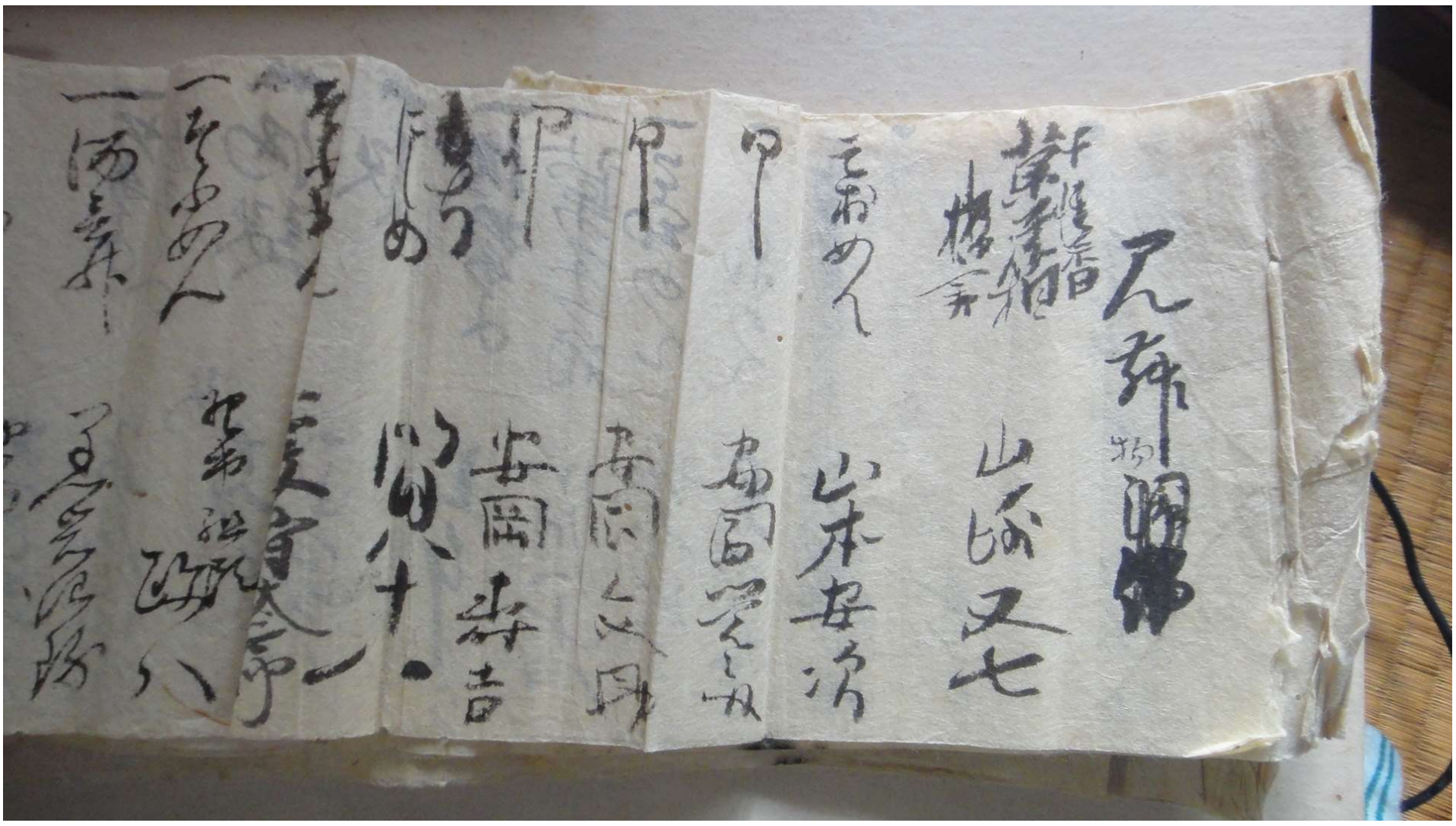
赤尾・・四坊・・惣田・・・・

野市組頭　政八　□□駒平躬　かぢ蔵

和食・・　恒石□平　徳弘□□□　小川升治　赤岡・・　魚屋濱次　村田馬太郎　岩井□次　竹村□□□　カマ卯平

村山守助

この葬儀で四坊山の墓地に遺骨はないですが、安岡恒之進の墓標を立てたのでしょう。



葬儀見舞　記録

＊「従五位大石圓翁略傳」によると「文久二年六月大石彌太郎翁は已に遊學の期盡き歸國の程に上つた・・七月に到り久振りに懐かしき故郷の野市村に歸つた一家團欒して其恙なきを祝したが其席未だ温かならざるに早くも十月には中國及び西國筋に探索用として出張の命を受けた・・・」とあります。七月に戻ったとありますので、偶々八月の葬儀に合ったのか、葬儀に合わせて戻ったのでしょうか。

齢延寺から文久三年二月十日付で出された恒之進の弟覚馬宛の祠掌證文があります。

祠掌證文之事

一金三両　祠掌料

并　密玉供膳椀　盛物差　火焼台

五具足等

為偏照院應心現月居士菩薩

右者永代為回向料本納□慎

本納仕・・・

文久三年　大坂天王寺町

亥二月十日　齢延寺

土州　安岡覚馬殿

金三両で墓石を揃え、永代供養など現在の費用と比較すると安く、色々の仏具も納めている。

恒之進が亡くなった時の大坂での葬儀は簡略だったのだろう。齢延寺に数多くの小さな墓標が積まれ、土佐の文字も見えました。恒之進も小さな墓で葬儀されたのだろう。半年経て祠掌料を払い戒名を貰い、川村貞衛の家も同じ時期に手続したので並べて墓石が置かれたのであろう。

文助日記に「文久三年正月廿七日　覚之助又京都御臨事御用相蒙出足家来ふけ村卯八」とあり、覚之助が京都に出掛けているので、覚馬の代りに覚之助が齢延寺に行き祠掌料などを納めたのでしょうか。

その後、覚之助は、藩からの命令で、京から戻され（早追か）謹慎処分になります。齢延寺からの證文を覚馬に渡すことが出来なかったのであれば、覚馬も出掛けたのだろうか。

祠堂證文之事

一 祠堂料

一 金二両

釈霊供 [illegible]

五月廿[illegible]日等

為備照院應心現月居士菩提

右者永代為祠堂料寄附被成候

奉納候ニ付 永代 [illegible]

寄附 [illegible] 回向 [illegible]

為後證仍如件

文久二年

壬戌十二月

[illegible]

[illegible]延寺

土州

安岡覚馬殿

阪神淡路大震災で墓は被害を受けましたが、永代供養のお願いお陰か、設置場所は変わりましたが立て直してくれました。現在、墓石が割れて来ているのが気になります。流離譚に「川村氏より年も若く、墓も小さくて」とあります。震災前の川村氏の墓石はもう台座がもう一つあり大きく見えたようです。

山北の葬儀の時に四坊山に墓石を作ったのでしょう。章太郎の「鏡川」に次の明治二十五年の又彦の手帳を紹介しています。

我ガ養父安岡恒之進墓碣毀損ノ報アリ早々是ノ修理ニ力ヲ効サントスルモ撰舉擾騒ト之ニ加フルニ自身微恙ニ羅ルヲ以テ果サス三月四日故前代議士植木枝盛君ノ葬式ニ担当スルヲ以テ病ヲ勉メテ出高居ル事五日病大ニ癒ス於是前約ヲ果サント欲シ三月十一日出帆ノ汽船高知丸接シ浦戸港出帆・・十三日　同日

小説「鏡川」には自由派と国民派の争いで、自由派であった安岡の新しい恒之進の墓石が毀損とされたと書いています。明治二十五年で一番新しいのは明治三年に立てられたお西系列の墓ですが、恒之進の墓が毀損されたか理由は不明です。

前述の又彦の手帳の於是前約ヲ果サント欲シとは山北の恒之進の毀損の墓を直したと読みました。船で出帆し神戸に行きますが、大阪の恒之進の墓補修は記録はありません。

四坊山の恒之進の墓及びその他にも修理した痕跡は見られません。又彦が手帳に誤りを書き残すことはないと思います、山北の恒之進の墓を取り換えたのだろうか。四坊の墓を掘れば、壊された墓の痕跡が出てくるのでしょうか。

四坊山墓地　安岡恒之進の墓

大阪齢延寺 川村貞衛、安岡恒之進の墓